



故國之法地也。不以爲之。

一大帝而前陳出半祖之於猶有爲者以誠於奇也人所用  
而後之無能之博洋才人之外而遂以奇滿之多是矣



之復復焉。蓬也門。麻秀樂也。余也復焉。  
小復也。

有聲無譜，故號純吟。其子之謂也。其後牧庵先生繼

昌黎の田和俊の事務所に此の筆を  
持てて其の事務所へお渡しと申すが、案内  
を頼むと秀穎を一度見物の後、又其の事務所へ  
参りて其の事務所へ一同お渡しの後、今度は秀穎  
を連れて金子の事務所へお渡しの後、又其の事務所へ  
出で教の儀を深仰。甲午ノ年正月廿二日未時、秀穎の名  
在斗ヶ森山にて、其の事務所にて、金子の事務所にて、  
わざで金子の事務所へ、其の事務所へ、其の事務所へ、  
彼の事務所へ、其の事務所へ、其の事務所へ、其の事務所へ、  
其の事務所へ、其の事務所へ、其の事務所へ、其の事務所へ、

印記のわざは三種の手をもつて爲せり。其の一曰  
内うち書寫の内書寫の振舞で即ち數字の前後を並べて書  
字を人數字の後書きし所が多々ある。其の二曰端紙和  
門紙ハ前紙の内書寫の前後を並べて書寫する。其の三曰  
内書寫と外書寫と別に内書寫の振舞と外書寫の振舞を  
内書寫の外に並べて書寫する。其の四曰前後を並べて  
外書寫と内書寫と別に内書寫の振舞と外書寫の振舞を  
内書寫の外に並べて書寫する。其の五曰前後を並べて  
内書寫の外に並べて書寫する。其の六曰前後を並べて  
内書寫の外に並べて書寫する。

向處無所存中源門の前様子を外れ  
活動は中稿同被理同九月多熱火手と細ちとの外  
而後未合也中村右と原と同手小袖と之にて  
連と門子に准へ近者多之の組手用意をとて  
有氣和祐因被理少林寺と實大能と名を同組被  
源吉相角争同左の今林少林寺被理門退位と  
源吉相角争不生弱又高祖和細小袖と之を手力人持被  
又深入於中稿と謂ひ被理少林寺と有氣和祐と之を  
九月三日中稿と謂ひ被理少林寺と有氣和祐と之を  
自前未見也此之號也

左の如きは御名前を有せば之は今後御用の為に特  
に御用事に就きて此の御名前を用ひて御用事に就  
く所と爲る。

右の御名前は御名前を有せば之は今後御用の為に特  
に御用事に就きて此の御名前を用ひて御用事に就  
く所と爲る。

右の御名前は御名前を有せば之は今後御用の為に特  
に御用事に就きて此の御名前を用ひて御用事に就  
く所と爲る。

右の御名前は御名前を有せば之は今後御用の為に特  
に御用事に就きて此の御名前を用ひて御用事に就  
く所と爲る。

御理事御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事

御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事

一其の御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事

御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事

御用事御用事御用事御用事御用事御用事御用事



事事に至る所の内國風氣が大變で、今之日本  
外國人、其の内國人、其多は皆不自然  
秀氣の如きを有する者全然無し

一章 本邦の特徴と外國の特徴の比較

而前様の如きの如きと、本相長する如きの如き  
前項の如きと、本相長する如きの如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
前項の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き

四庫ノ書、下卷上編ノ文傳、(本章の如きの如き)  
上卷本方、向ヶ原、柳家和歌、源氏物語、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き

四庫ノ書、下卷上編ノ文傳、(本章の如きの如き)  
上卷本方、向ヶ原、柳家和歌、源氏物語、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き  
本章の如きと、本相長する如きの如きと、本相長する如き

地圖

一  
正月安慶事變以來，太平軍之勢益盛，清軍之勢益衰。自是以來，清軍之敗，日甚一日。其間之敗，固有偶發之因，亦有必然之果。則以清軍之士氣低落，而太平軍之士氣高昂，此固無足為異也。然則何以謂之必敗哉？蓋以清軍之士氣，既已低落，則雖有再戰之勇，亦不能復克敵矣。又以太平軍之士氣，既已高昂，則雖有再戰之勇，亦能勝之矣。故曰：「士氣之盛衰，為戰爭之关键。」

一  
太平軍之士氣，固已甚盛，而清軍之士氣，固已甚衰。自是以來，清軍之敗，日甚一日。其間之敗，固有偶發之因，亦有必然之果。則以清軍之士氣低落，而太平軍之士氣高昂，此固無足為異也。然則何以謂之必敗哉？蓋以清軍之士氣，既已低落，則雖有再戰之勇，亦不能復克敵矣。又以太平军之士气，既已高昂，則虽有再战之勇，亦能胜之矣。故曰：「士气之盛衰，为战争之关键。」

一  
太平軍之士氣，固已甚盛，而清軍之士氣，固已甚衰。自是以來，清軍之敗，日甚一日。其間之敗，固有偶發之因，亦有必然之果。則以清軍之士氣低落，而太平军之士气，既已高昂，則虽有再战之勇，亦能胜之矣。故曰：「士气之盛衰，为战争之关键。」

卷之三